アイデンティティ感覚に関する一考察

― 直接体験的なアイデンティティ感覚 ―

Study on Sense of Identity: Directly Experiential Sense of Identity

飯　沼　和　希*・神　田　信　彦**
Kazuki IINUMA, Nobuhiko KANDA

要旨：本研究では、アイデンティティ感覚に対する従来のアプローチの問題点を指摘し、アイデンティティ感覚を「アクチュアリティ」と Gendrin（1962）の体験過程理論、フォーカシングを用いて考察することで、指摘した問題を克服するための「直接体験的なアイデンティティ感覚」概念を提案した。直接体験的なアイデンティティ感覚はアイデンティティの原体験であり、「わたし」がわたしであるという実感である。それは個人にとっての生活上で感じられる素朴な体験であり、アクチュアルな体験としての感覚と体験を意識化・象徴化したものであるとした。またこの感覚は、体験のうちに「地」化されたものがすでに意識化された感覚を手がかりに「図」化されていくことで実感されるものであるとし、自己や自身の生き方に対して「しっくり」くる感覚として、プロセス的に感じられるものであると結論づけた。

キーワード：アイデンティティ感覚，アクチュアリティ，フォーカシング，現象学

1．問題と目的

アイデンティティは多くは青年（若者）の問題とされ（浅野，2009），青年がどのような状態にあり，どのように生きているのかをとらえるために便利な装置として扱われているが，それに通底するのは，「わたし」がわたしであることに関する問題であると考えられる。アイデンティティの中核は，自分自身との斉一性と連続性の感覚であり，その斉一性と連続性を他者と共有することの自覚である（Erikson，1959）。また，西平（1973）は青年を個人が生活している客観的で全体的な空間である全生活空間と青年の主観的で内的な世界によって会得しようとし，青年の主観的世界をアイデンティティとして扱った。西平はこの研究で青年の主観的世界全体をアイデンティティとしたと言える。これを踏まえると，アイデンティティは「わたし」の存在に関する問題であり，それに応答するためには「わたし」に生じている体験を扱う必要があるとも考えられる。しかし，これまでのアイデンティティ研究が青年のアイデンティティ感覚そのものを全体的・直接的に捉えられたのかに関しては疑問がある。以下に，これまでの研究の問題点に言及する。
心理学において対象とされるアイデンティティは Erikson 理論をもとにした，人生を形成し

* いいぬま かずき　文教大学大学院人間科学研究科
** かんだ のぶひこ　文教大学人間科学部

ていく力動的な動きであり，多様な自己の葛藤が調整され統合されている状態でもある（西平，1993）。心理学的なアイデンティティ研究では，Erikson 理論の解釈やアイデンティティ形成プロセス研究の発展に伴って社会学の視点から指摘されていた，アイデンティティの流動性（Baumann，2001）や社会的関係（岡本，2002），多元的な自己（溝上，2008）などを取り入れることで，主観的世界を対象としながら社会学的視点からもアイデンティティへアプローチされてきたと言える。しかし，Erikson の記述から項目を設定した尺度による測定（谷，2001）や特定事実に限定したインタビュー（Grotevant & Cooper，1981）によって切り取られたアイデンティティを対象としており，アイデンティティを直接的に捉えているとは言えない。青年の全生活空間の把握と主観的内容の解釈（西平，1973；大野，1995）の研究から，全体的でかつ日常生活で体験するアイデンティティ感覚を捉えられる可能性が示唆されるが，これらの研究で抽出された生活上のアイデンティティ感覚は体験する状況にフォーカスしたものであり，青年が実際に体験する感覚そのものを直接的に捉えたものではないと考えられる。

そこで本研究では，アイデンティティの直接的な感覚を「直接体験的なアイデンティティ感覚」とし，それをどのように捉えればよいのかを，アクチュアリティを鍵概念として考察する。

２．アクチュアリティとは

アクチュアリティとはひとりの人間が生活し生きている生の体験である。それは人間が生活しているなかで前意識的に経験され，世界と触れ合う自我の全体的な体験である。木村（1970/2001）によれば，ある行為・体験をしていることは，「その行為」や「体験」，「私」，「自己」といったものが意識される以前に“私にとってはもっと素朴で直接的な事実”（木村，1970/2001 p.107）として存在することである。また，行為・体験している「わたし」は行為する対象としてあるのではなく行為する主体とされる（木村，1993/2001）。

また，アクチュアル現実は，リアルな事実とは異なっている。事実としての経験（知覚）はその場に真に存在している事物であるが，アクチュアルな現実は主観的に歪められて体験されるものであり，事実に出会った「わたし」が，環境から知覚するものを「図」化することで，事実として得られたものを「地」として見えなくすることで生じる体験である（Hanson，1958；大倉，2011）。すなわち，「わたし」はそうした背景にある様々な要素を用いたゲシュタルトとして現実を「図」化し，その世界を主観的に生きているのである。

しかし，こうしたアクチュアルな現実は，それを生きているその瞬間には意識することができず，アクチュアリティは経験が過去となった後に意識することができるとされる（木村，1993/2002）。意識化され，行為主体に知られたものは行為主体が対象化した結果であり，そこで対象化するものはすでに過ぎ去ったものであると言える。アクチュアリティとは「いま，ここ」で体験している現実であるから，対象化され意識化されたものはすでにその人が生きるアクチュアリティではなくなっている。ある行為や体験をしている最中には，行為に関わるほかのものを対象化しているが，行為・体験する者としての「わたし」までは対象化していないのである。先の「図」化によるゲシュタルトとしての経験で言えば，たしかに「図」化された世界をアクチュアルに生きているのだが，「図」化されたものがなんであるのかを意識することができるのは，実際に「図」化された世界を生きているその瞬間にではなく，その次の瞬間においてである。すなわち，わたしたちの生きるアクチュアリティは体験しているそのときには無意識の状態にあると考えられる。現実に生きているアクチュアリティの内容は過去のものになった後に意識することが可能になるのであるから，アクチュアリティはその意味で前意識的なものである。

３．アイデンティティのアクチュアルな感覚

以上，アクチュアリティが表すことを記述してきた。「わたし」がわたしであるということを扱うアイデンティティ感覚が，ひとが実際に感じる体験であることを考慮するならば，「わたし」に関するアクチュアルな感覚はアイデンティティにおいて重要であると考えられる。アイデンティティの感覚を体験するためには「わたし」がアクチュアリティを体験していなければならない。なぜならば，アイデンティティの感覚を得る行為者は他でもない「わたし」だからである。すなわち，「わたし」が世界内に存在していなければアイデンティティの感覚を感じることはできないのである。こうした自己と「わたし」の関係は Heidegger（1927）が“現存在はつねに自己自身に先立つ”（桑木訳，1960：pp.192）と表現したことと同様であると考えられ，それはアクチュアリティが非対象的なものであり，アクチュアリティが無ければアイデンティティもまた生じ得ないとも言える。アイデンティティは社会において存在する「わたし」がわたしである感覚である。そこで空間的・時間的に世界における自己が占める場が必要である。それを実行する主体が「わたし」であるのであれば，アイデンティティの感覚はアクチュアルな現実が経験されることと同様の過程を踏むことで体験されると考えられる。

ここで，アクチュアリティが直接体験的なアイデンティティ感覚として実感されることを考慮すると，アクチュアリティを実感するものはそれを体験した後の「わたし」であると考えられる。それは，アクチュアリティの存在を確認ためには，それを知覚するための事実的な人間とそれが形作るパースペクティブが無ければならないため（木村，1993）であり，アクチュアリティを体験した「わたし」が後にアクチュアルに体験した内容を意識化し知覚することによって始めてアクチュアリティが存在することが確証されると考えられる。すなわち，「わたし」のアクチュアルな体験のみでは，アイデンティティの直接的な感覚を捉えることは不可能であり，事実として対象化されることをも含む必要がある。

以上のアクチュアリティの特徴を考慮して，直接体験的なアイデンティティ感覚を，アクチュアルに体験される「わたし」がわたしである感覚であり，「わたし」についてのアクチュアルな体験が知覚として意識化されたものでもあるとする。このような，ひとの直接体験的なアイデンティティを扱った研究は筆者が探したところでは大倉（2011）のみである。しかし，大倉の研究はアイデンティティ拡散を対象としたものである。また，大倉は感覚それ自体に関してというよりも青年の様態に言及しており，アイデンティティ感覚そのものを対象とした研究は筆者が探したなかでは未だ見られない。

４．直接体験的なアイデンティティ感覚の実感

アイデンティティのアクチュアルな感覚を直接体験的なアイデンティティ感覚とすることを示した。では，意識化された直接体験的なアイデンティティ感覚はどのような感覚として意識する本人に知覚されるのか。アクチュアリティがどのように知覚されていくのかを通じて，その感覚がどのような形で現れるのかを考察する。

アクチュアリティの知覚は，一度ゲシュタルトにおいて「図」化されることによって背後に退いた「地」が意識されて「図」へと浸入していくことによってなされていく（大倉，2011）。例えば，音楽を聴いているときに「やすらぎ」が「図」化されたとする。しかし，複雑で様々な現実のゲシュタルトであるアクチュアリティを示すには，「やすらぎ」という言葉から得られる意味だけでは不足している。そこで感じられた「やすらぎ」は，「地」化された部屋の明るさや

ちょうどよい椅子の固さ，鼻から脳まで抜けるような香ばしいコーヒーの匂いなどの事実性に支えられているのである。「わたし」が生きたアクチュアリティは確かに「やすらぎ」を含むのだが，それだけではなく，「わたし」が生きた現実は，背後に退いた「地」としての部屋の明るさやちょうどよい椅子の固さを含んだゲシュタルトとして感じられるのである。すなわち，アクチュアリティの意識化は，「図」化されたアクチュアリティを示すことができそうな言葉を手がかりとして，「地」とされていたその他の要素を言葉の説明として付け加えることでなされると言える。このようなプロセスはGendrin（1962）が提唱し理論化したフォーカシングに類似している。フォーカシングは，人が自分が感じているものや体験しているものに注意を向け，それがどのようなものか掴み表現したりそれと共に居たりすることである。そこでは，なんらかの問題についての感覚であるフェルト・センスを表現するのにふさわしいと思う言葉を手がかり（ハンドル）として体験しているフェルト・センスが何であるのか，どのようなものであるのかを探っていく。その作業が進んでいき体験にフェルト・シフトが起こるとき，解放感とその言葉が「しっくりくる」感覚が生じるとされる。直接体験的なアイデンティティ感覚もフェルト・センスと同様に，そのとき浮かんできた「図」化された言葉だけでは捉えることができず，その言葉をきっかけに「地」を意識することで近づくと考えられる。また，フェルト・センスも同様につねに感じられている体験であり，その体験は過程上にあり変化し続ける行為的なものとされる（Gendrin，1962）。フェルト・センスと同様の過程によって直接体験的なアイデンティティ感覚が感じられるとすれば，直接体験的なアイデンティティ感覚もそのとき意識化したアクチュアリティが「わたし」にとって「しっくり」くるような感覚を得ると言える。逆説的に，意識化された体験が「わたし」にとって「しっくり」こない場合には，それは直接体験的なアイデンティティ感覚ではなく，「しっくり」くる表現を見つけることができない，しっくりくる「わたし」を体験的にも対象的にも見つけることのできない状態が，直接体験的なアイデンティティ感覚を喪失した状態であると考えられる。わたしがどのように生きているのか，どのように生きてきたのか，どのように生きていくのか，現実に「わたし」が生きていくことを対象化した際に表象として上がってきたものが「しっくり」くる場合，「わたし」がわたしであるという，直接体験的なアイデンティティ感覚が知覚されていると言える。

では，「わたし」が「しっくり」くる感覚を体験するとはどのようなことであるのか。それを，フォーカシングを通じて考察する。漠然としていて前概念的なフェルト・センスに触れることで，自身がその場で体験していることに注意を向けて象徴化するプロセスがフォーカシングである（Gendrin，1981）。そして，フォーカシングによってフェルト・センスがもつ意味体験が変化することで，表現していることがぴったりであるような，「しっくり」くる感覚と解放感が生じるとされる（Gendrin，1981）。すなわち，フェルト・センスに触れるためには，それに注意を向けて，言語やイメージとして象徴化する過程が必要であると言える。そして，体験過程理論がプロセスであることから，「しっくり」くる感覚はプロセスを包含したものであることが考えられる。

フォーカシングにおける象徴化のプロセスにおいて，はじめは体験が漠然としたもので「しっくり」くるようなものではないのであるが，フォーカシングが進むことで体験が変化し，「しっくり」くる感覚が生じるとされる（Gendrin，1981）。これと同様に「生き方」の感覚においても，わたしについての感覚に注意が向いた後，漠然とした「しっくり」こない，違和感のような感覚を経験すると推測される。すなわち，直接体験的なアイデンティティ感覚はつねに体験されているが，それが問題となるのは自己にフォーカスされるときであると推測される。これより，意識されないときには「生き方」の感覚は問題にされず，「わたし」がわたしであることは自明なこ

とであると考えられる。しかし，自己に注意が向くことで多様な自己の存在が意識化され，はじめに言語として象徴化された自己は一端であるために「しっくり」くる感覚は得られず違和感が生じる。その後，象徴化された感覚や自己を手がかりに様々な自己が意識化されていくことで自己の表現が変化していき，一端であったものが多様な自己が絡み合う複雑な自己が浮かび上がってくる。自己の要素が「図」化され自己が把握されることで，「わたし」が「しっくり」くる感覚が得られると考えられる。すなわち，「しっくり」くる感覚は普段は自明なものとして意識化されないが，自己が意識され違和感のような「しっくり」こない感覚が生じ，意識上で自己が全体化していき，全体化した自己を再認することで「わたし」にとって自己が「しっくり」くる感覚が生じると言える。すなわち，直接体験的なアイデンティティ感覚が感じられる過程は，自己の内面に焦点化して体験を探ることであり，アイデンティティ形成の個人的な探求の過程のミクロな側面であると推測される。以上の議論により，「わたし」がわたしであることの体験である直接体験的なアイデンティティ感覚は，意識化された自己が「しっくり」こない体験をした後，「地」としての自己の「図」への侵入によって体験が変化して，再確認した場合に「しっくり」くる感覚であると考えられる。ここで示した直接体験的なアイデンティティ感覚は，日常的に経験する前概念的で素朴な体験であり，それを意識化したものでもあった。直接体験的なアイデンティティ感覚を従来のアイデンティティ感覚と対比させて述べると（図１），直接体験的なアイデンティティ感覚はアイデンティティ感覚を感じるものの多くは実感していると推測され，その内容としては従来のアイデンティティ感覚の圏内にあると言える。しかし，アイデンティティ感覚が言語的意味に従ってより一般化された理念系のもとで扱われるものであるのに対し，直接体験的なアイデンティティ感覚は個人が日常生活で体験した感覚そのものである。その感覚は表現することが困難な複雑性をもち，感覚それ自体は一般化され得ないものであると考えられる。すなわち，直接体験的なアイデンティティ感覚とアイデンティティ感覚は同様の人物を対象としながら，アイデンティティ感覚が客観的パラダイムに則っているのに対し，直接体験的なアイデンティティ感覚は主観的体験のパラダイムによる捉え方であると言える。しかしながら，パラダイムが異なればそこから見えてくるものも異なるため，アイデンティティ感覚と直接体験的なアイデンティティ感覚は表面上は異なるものであると推測される。

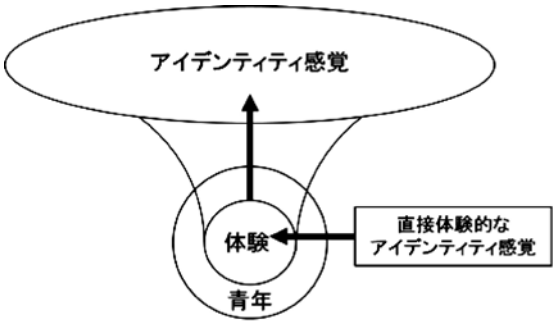

図１　「直接体験的なアイデンティティ感覚」とアイデンティティ感覚の位置づけ

５．結論と今後の展望

以上の議論により，アイデンティティの直接的な感覚をアクチュアリティを通じて考察した。直接体験的なアイデンティティ感覚は「わたし」がわたしであることを行為主体が直接的に体験することであり，その体験は意識化されたものを手掛かりに感覚全体を意識化していく過程を経て感じることのできる素朴な体験が「わたし」にとって「しっくりくる」感覚であると考察した。ここで提案された直接体験的なアイデンティティ感覚は，アイデンティティ感覚を素朴な直接体験としてアプローチしたものであり，今後，調査を実施することによってアイデンティティ感覚そのものにより迫っていく可能性が示唆される。そのために，直接体験的なアイデンティティを抽出するための項目の作成や，人間を体験的に理解する方法を用いる必要があると言える。

引用文献

Bauman, Z. (2004). Identity. Polity Press. （伊藤　茂（訳）(2007). アイデンティティ　日本経済評論社）

Erikson, E. H. (1959). Identity and the Life Cycle: selected papers. Psychological issues, Vol. 1. New York. International Universities Press.（小此木　啓吾（訳）(1973). 自我同一性　誠信書房）

Gendrin, E. T. (1962). Experiencing and the creation of meaning: A philosophical and psychological approach to the subjective. New York. Free press of Glencoe.(筒井健雄（訳）(1993). 体験過程と意味の創造　ぶっく東京）

Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. (1981). Assessing adolescent identity in the areas of occupation, religion, politics, friendships, dating, and sex roles: Manual for administration and coding of the interview. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 11, 52 (ms. No.2295).

Hanson, N. R. (1958). Patterns of discovery: An inquiry into the conceptual foundation of science. Cambridge University press. （村上陽一郎（訳）(1986). 科学的発見のパターン　講談社学術文庫）

Heidegger, M. (1927). Sein und Zeit. Verlag, M. N.(Eds), Tübingen.(桑木　務（1960). 存在と時間：上・中・下　岩波文庫）

梶田叡一 (1998). 意識としての自己：自己意識研究序説　金子書房.

木村　敏 (1970). 自覚の精神病理　紀伊国屋書店.

木村　敏 (1993). 時間の間主観性　現代思想, 21 (3), 青土社.

溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学 ── 他者の森をかけ抜けて自己になる　世界思想社.

西平直喜 (1973). 青年心理学　共立出版.

西平　直 (1993). エリクソンの人間学　東京大学出版局.

岡本祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房.

大倉得史 (2011).「語り合い」のアイデンティティ心理学　京都大学学術出版会.

大野　久 (1995). 青年期の自己意識と生き方　講座生涯発達心理学 ── 4：青年期　自己への問い直し　金子書房　pp.89-123.

谷　冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造 ── 多次元同一性尺度（MEIS）の作成　教育心理学研究, 2001, 49, 265-273.